

## 伊那市創造館所蔵「伊澤修二資料」

### —『伊澤修二選集』10 視話法と訛音吃音の矯正より—

塚 田 博 之

#### 要旨

伊澤修二は、視話法を日本に導入し、訛音吃音矯正や聾教育に大きな功績を残した人物として知られている。伊澤修二に関する資料は、先の大戦中に信濃教育会で計画された『伊澤修二全集』の編集主任となった高橋慎一郎の努力によって、伊澤修二の嗣子勝麿のもとにあったものを1943（昭和18）年6月に上伊那図書館に寄贈することになり、戦災を免れることができた。

聴覚言語障がい者や吃音者の教育に生かす視話法などの音声言語教育のプログラムは、文部省の田中不二麿が交渉の先鞭を付け、目賀田種太郎と伊澤修二によって日本に導入された。吃音矯正事業は、1900（明治33）年、大病から奇跡の生還を果たした伊澤修二が視話法を使った吃音矯正プログラムについて来日したグレアム・ベルからの示唆を受けて見通しが得られ、1903（明治36）年に設立した楽石社を中心に、全国各地で展開された。伊澤修二の死後も嗣子伊澤勝麿らは、通信教育や出版事業によって吃音者の救済事業を展開した。今回紹介する資料は、いくつかの書籍のもととなった伊澤修二自身の手による吃音矯正に関する自筆原稿である。

キーワード：伊澤修二選集、高橋慎一郎、グレアム・ベル、楽石社

## 1. 伊澤資料について

### 1.1. 『伊澤修二選集』の編纂

音楽教育や台湾における教育、そして視話法と訛音吃音矯正など近代日本の教育に大きな、そして独特の功績を残した伊澤修二（1851～1917）の著作や思想を後世に残すため、信濃教育会は『伊澤修二全集』の編集出版を1942（昭和17）に計画した。福島安正と湯本武比古の全集もあわせて編集が計画され、それぞれ地元の郡教育会が編集実務を担当することになった。<sup>1</sup>

1 『伊澤修二選集』編纂過程については、塚田博之「高橋慎一郎による伊澤修二全集編纂」（『信濃』第63巻9号 2011（平成23）年9月）参照。

『伊澤修二全集』の編集を担当した上伊那教育会は、編集主任に高橋慎一郎（1887～1949）を、北村勝雄、笠原政市、淀川茂重らを編集委員に委嘱した。全集編纂の最初の作業は関係資料の収集である。

当時、伊澤修二関係資料の多くは小石川区の楽石社を中心に東京にあり、アジア太平洋戦争さなかの制約された交通事情、食糧事情の中、高橋慎一郎はじめ、編集委員は関係各機関や縁故者を訪ね歩いて資料収集に奔走した。収集資料の中核となったのは、小石川区楽石社にあった伊澤家所蔵資料であった。1943（昭和18）年6月、高橋慎一郎をして「資料浩瀚豊富にして宝の山に入りし感あり」「根本資料多数殆ど網羅するか」と言わしめた伊澤家所蔵資料は、伊那町（現伊那市）上伊那図書館に寄贈されることになった。資料収集が軌道に乗り、高橋の胸には伊澤修二の伝記執筆の構想も生まれたが、1945（昭和20）年8月の敗戦は、すべての計画と構想を振り出しに戻すに等しい衝撃であった。

伊那谷西山麓の小黒原で食糧増産のための開拓事業に参加していた高橋は、伊澤修二全集編纂の戦後の新たな展開について何等語ることなく1949（昭和24）年急死する。

一方で新たに加えられた東京音楽学校関係資料や辰野町矢島麟太郎氏所蔵資料をもとに、宮下忠道委員長を先頭に、編集事業が再スタートしたのは1950（昭和25）年のことであった。信濃教育会との協議で「全集」は「選集」とすることとし、編集実務を担当する伊藤泰輔の尽力によって、1958（昭和33）年、信濃教育会編『伊澤修二選集』は発刊された。資料目録掲載資料数411、活字化され全文が掲載された資料数150、年譜等も含めた総頁は1000に及ぶ大冊で、刊行後半世紀を経た今日でも伊澤修二に関する第一級資料である。資料は、伊澤修二の手による記録などを中心とした上記『伊澤修二選集』のもととなっている「伊澤資料」と約3000冊の伊澤家の蔵書「伊澤コレクション」とで構成されている。これらは長く上伊那郷土館の人物室に収蔵され、上伊那教育会が所蔵・管理してきたが、上伊那図書館が改築、耐震工事を経て「伊那市創造館」として生まれ変わった際に、教育会所蔵資料は伊那市に寄託された。現在、「伊澤資料」「伊澤コレクション」ともに創造館の収蔵庫に収められている。

## 1.2 10 視話法と訛音吃音の矯正

伊澤修二はアメリカ留学中に英語の発音に悩み、グレアム・ベル（1847～1922）から視話法（Visible Speech）を学んで正確な発音を身につけた。日本に帰ってきてからは、様々な分野で伊澤はこの視話法を応用している。聾啞教育では、手話を用いることなく、声を出して表現する口話法を視話法を活用して実践した。<sup>2</sup>

グレアム・ベル（Graham Bell）は電話を発明した人物として有名だが、当時は演説や話し言葉のインストラクター、または言語障がい者に発話や発声の技術を教え

2 1.2のもとになっているのは、奥中康人『国家と音楽 伊澤修二がめざした近代日本』（春秋社 2008（平成20）年）第4章 国語と音楽 文明の「声」獲得（p127～186）、である。

る教師、ボストン大学スクール・オブ・オラトリーの教授として有名であった。ベルの祖父アレキサンダー、父メルヴィルも雄弁術、演説や朗読の教師で、吃音のような言語障がいも矯正することもやっていた。特に父メルヴィル（Melville Bell 1819～1905）は視話法を開発した人物である。息子のグレーム・ベルは父親の視話法を継承し、イギリスから、カナダへ、そしてアメリカに移住した。初めマサチューセッツ州ノーサンプトンの聴覚言語障がい者学校で教えていたベルは1873（明治6）年、ボストン大学スクール・オブ・オラトリーの音声学教授に招かれる。

1872（明治5）年、岩倉使節団として渡米していた田中不二磨はノーサンプトンの聴覚言語障がい者学校で教えていたベルを訪問し、日本の聴覚言語障がい者に視話法が応用できないか意見を交わした。伊澤修二が教育取調のため1875（明治8）年に渡米した時の留学生監督、目賀田種太郎がアメリカに留学したのは1870（明治3）年のことで、ハーヴァード大学とボストン大学のスクール・オブ・オラトリーに入学している。目賀田は読み方や発音、言語障がい者の教育にも関心をもち、英国人やイタリア人、ドイツ人に比べて、アメリカ人の話し言葉に課題があるとして教員の講習会を開催している様子や、ワシントンの黒人学校で発声法を教えている様子が記されたボストン学務課の報告を日本語に翻訳して報告している。また、目賀田自身がゲストとして招かれたボストン大学スクール・オブ・オラトリーの視話法の公開デモンストレーションでは、「雨・飴」「柿・牡蠣」のように発音が同じでイントネーションの違いで区別される日本語を視話法を使うことで学生が正確に再現できることも報告している。

伊澤の自伝では、米国留学中に英語の発音で悩んだ修二が、フィラデルフィア博覧会場でベルの掛け図を見つけ、ボストンのベルの家を訪問したエピソードが書かれているが、文部官僚田中不二磨がベルとの面会で先鞭を付け、目賀田が調査して伊澤が実践面を学ぶという組織的な動きからは、伊澤とベルの出会いは偶然ではなく、文部省を中心とした音楽や言語障がい者教育など音声言語教育システム導入の意図があったことは想像に難くない。いずれにせよ、音声を発する仕組みを科学的に把握し、訓練することでより進歩した文明社会にふさわしい音声を獲得することは、新しい近代日本にとってどうしても必要なことであった。

日本に帰国した伊澤は、この視話法を方言の矯正や言語障がい者の吃音矯正、台湾における言語教育等に生かした。伊澤の末弟末五郎には吃音があったが、伊澤が視話法をもとにした方法で発音矯正を行い、改善したという。1900（明治33）年、伊澤は、生死の境をさまよう大病を患ったが、奇跡的に回復し、その後は貴族院議員以外の官職は一切やめ、まったく私的な立場で、1903（明治36）年「楽石社」を結成して「吃音矯正運動」に全力を傾ける。<sup>3</sup>

楽石社には言語研究部を置き、以下のような任務に当たった。

3 帰国後の吃音矯正運動については、上沼八郎『伊澤修二』（吉川弘文館人物叢書 1962（昭和37）年 第10楽石社（p291～325）を参照した。

一 視話法ヲ伝習ス 二 正シキ日本語音ヲ伝習ス 三 正シキ英語音ヲ伝習ス  
 四 正シキ清国語音ヲ伝習ス 五 正シキ台湾語音ヲ伝習ス 六 方言ノ訛ヲ矯正ス  
 七 吃音ヲ矯正ス 八 啞子ニモノヲ言ハシム

これらの内容にしたがって生徒を募集したところ、実際に集まった者は吃音矯正の希望者ばかりであった。1898（明治31）年、来日したグレーム・ベルと帝国ホテルで久しぶりに面会した伊澤は、吃音者の矯正について、各語の母音だけ長く発音させてから、適当な子音を与えれば効果がある、という方法について示唆を受けた。さらに、秋田の訛音矯正にも応用する中で、第一に声帯を張開し、同時に横隔膜を強くする練習を行い、第二に、まず各語の子音をまったく母音化し、続いて各子音に適当な父音を加えて発音する練習を行う、さらに吃音者にとって最も発音しにくい密閉字音1,600語を選んで、呼息吸息により練習する、という方法にたどり着くのである。東京小石川区の楽石社を中心に、各地に矯正所を置き、通信教育や出張矯正などの方法で全国各地の吃音者のニーズに応じ、時には大陸にも足を伸ばして中国や朝鮮でも矯正事業を展開した。故郷高遠町の建福寺で直接矯正を施す伊澤修二の写像があるが<sup>4</sup>数多くの多方面にわたる業績を残した伊澤の最後のライフワークがこの吃音矯正事業であった。以下に資料として紹介する「吃音通信矯正伝習並びに量気計説明書」（1911（明治44）年6月 罫紙26枚綴り）は、通信矯正に着手したころの原稿で、嗣子勝麿が1922（大正11）年に出版した『家庭どもり矯正法』、それを1923（大正12）年改題出版した『特許品応用どもり通信矯正法』のもととなった伊澤修二自身による自筆原稿である。なお、『伊澤修二選集』の資料目録には、「吃音通信矯正伝習並びに量気計説明書」と書かれているが、原資料の表題は以下の通りとなっている。

## 2. 科学的吃音矯正 吃音矯正に就き最初に心得べき大切なる条項<sup>5</sup>

### 2.1 1枚目

矯正（朱書きで）印刷ヲ以テ筆記二代フ

吃音矯正に就き最初に心得べき大切なる条項

今日から通信矯正を始めます。その矯正を始める前に先ずよく心得て居らねばならぬ大切な事項がありますから、其の心得を第一に話します。其れをよく聞いて終始念頭に置いて練習していくこと、自ら効果も早く挙がる。故によく是から話す事を聞いて、其れを常に守って往かねばならぬ。

先づ第一に吃りと云ふものは如何なるものであるかといへば、吃りといふは、啞であるとか或は盲であるとかいふやうな者とは全く異って居る。啞とか盲とかいふ者は、

4 『写真集 高遠のあゆみ』高遠町教育委員会編 1992年p75。

5 目録には「吃音通信矯正伝習並びに量気計説明書」となっているが、オリジナル資料にはこのよう書かれているので、ここではオリジナルを優先する。今日の人権の視点からすると、不適切な表現もあるが、オリジナルのまま掲載することとする。

所謂不具者で、五官の中が一つ缺けて居る。盲ならば視る官能即ち視官と云ふものが缺けて居り、啞であれば聴官即ち聴く方の官能が全く缺けて居る。即ち五官の中の一つ缺けて居るから、夫が為に不具である。

## 2.2 2枚目

之をどうかして癒してやりたいと思うて、教育者が如何に力を尽しても、五官の中缺けて居る官能を補ふことは出来ぬ。不具は教育の力で癒すことは出来ぬ。唯或る相当の他官を以って其の缺けて居る官能の代りに使って、どうかかうか用便の足るやうにしてやることは出来ても、完全な人にするには出来ぬ。然るに吃りといふはさう云ふものでなく、全く五官の具足した完全な人であるけれども、物を言ふ時に言へない、外から見ると殆ど不具者であるが如く見ゆる。夫故他からしては、不具者扱ひにせられ、自分も不具者と思ひ居るから、尚ほ物を言ふことが出来ないで、他人からは吃り吃りと云って罵られ嘲られて、実に悲惨なる生涯を送るのである。そこで、結局吃りといふものは何であるかと云へば、ただ発音の上の一つの悪い癖が附いて居る為めに、今言ふが如き悲惨なる状態に居る者である。本社で之を矯正する

## 2.3 3枚目

と云ふのは其の悪い癖を取りてやるのである。其の癖を取去るには如何にすると云ふことをこれから話すのであるから、其れを一々能く聞いて、其の通りに守りて往かなければならぬ。

さてこの吃りと云ふものは、聲に一種の悪癖が付いたのであると云ふからは、先づ第一に其の癖が付いたとは如何なることかと云ふことを了解しなくてはならぬ。其の悪癖の根本を説明するには、更に其の本源にさかのぼって、癖の付かない純粹の聲といふものは、如何なるものであると云ふ事から説き始めなくてはならぬ。抑も人の聲といふものは先づ何からどうして出来るのであるかといへば、元來聲は人の氣息（いき）から出来る。其の氣息が如何にして聲が出来るかと言ふことを示すために此の書の初めに図解が附けてある。是は生理学を一と通り学んだ人ならばすぐ解る。其の第一図は人体の胸板を取って胸の内

## 2.4 4枚目

部を見せ、即ち胸腔内の機関のうちで呼吸に関係あるものを見せたのである。ここに左右の肺臓があり、それから木の枝の様に支出したものが気管支で、それが双方合して一本の気管となり、此の気管が咽喉に通って居る。此の気管の上の方に脹れた所があるのが喉頭である。此の喉頭の中に軟骨があり、其の喉頭軟骨の中に聲を作る為に大切な仕掛けがある。其の中の仕掛けの事は後に詳しく話すが、先づ以て喉頭は何処にあるかを知らねばならぬ。喉頭は指を以て触ってみれば、三角形に突起してグリグリと感ずる此れが喉頭軟骨である。其れから下の方（第一図横隔膜以上）が胸腔で、

是より下（横隔膜以下）が腹腔である。胸腔と腹腔との間に黒線を以って示した膜のような筋がある。是が横隔膜である。此の横隔膜は収縮したり弛緩したりするものであるから、横隔膜に力を

## 2.5 5枚目

入れてこれを収縮させると、臓腑を壓へるから、腹が前に出る。即ち仰臥して居れば腹が上の方に高く上がる。暫くして横隔膜が元に復（かえ）れば臓腑が内に這入って腹がへこむやうになる。即ち仰臥の態なれば、腹が下の方に低くなる。さう云ふやうに腹を使って呼吸をしなくては、聲を作るための正しい呼吸は出来ぬ。それを一般の生理書杯に書いてあるのは、肋間筋を使って肩で氣息をするやうに書いてある。それは、普通の呼吸法で人間が生きて居るだけにはそれでも差支ないが、正しい聲を造り、本当の聲を出すには、其れでは不可ぬ。腹を動かしてする呼吸でなくては、聲を作る真正の呼吸とは言へぬ。其れであるからして、第一に大切な事は、横隔膜の力で氣息を拵（こしら）えることが出来なくてはならぬ。これが外から見れば腹で呼吸するやうに見えるから、腹式呼吸と云ふのである。

腹を動かして呼吸をする理は何いふ

## 2.6 6枚目

理合であるかといふと、先づ此の横隔膜（第二図）が収縮して下ると、胸腔内の肺に入ってをる空氣が薄くなる。即ち其の密度が疎になる。氣體といふものは同じ容量のものを大きな器に容れると淡くなり、小さな器に容れると濃厚になる。其の事は貴君も物理書で学んだであらう。夫故に横隔膜が収縮して下ると云へば、あたかも桶の底が下に下ったやうなものであるから、胸腔が広くなる。広くなると肺内の空氣が淡くなる。之を口外の空氣に比すれば其の密度は疎であるから、肺の内外の空氣の密度の疎蜜を平均する為に口外にある濃い空氣が自然に中に這入って来る。これが氣息を取るとか吸ふとか云ふ呼吸の吸息（いき）である。其れから此の収縮した横隔膜が元の位置に復（かえ）るといふと今度はあたかも桶の底が上がったやうなものであるから、胸腔が小さくなる。小さくなると肺内の空氣が濃厚になって或る部分

## 2.7 7枚目

は余る。其の余った部分は氣管を通して口から外に出る。即ち是が氣息を吐くとか云ふ呼吸の呼息である。結局横隔膜を動かして居れば、自然に空氣が這入ったり出たりする。然らばかやうに呼吸をしなくては聲を作る為の氣息は出来ぬ。所が人に依っては生来横隔膜の弱い人とか或は病弱杯で横隔膜を十分使ひ慣れぬ人があるが、大概健全に成長した人ならば、腹で呼吸をすることは自然に知って實地にやっている。そこで生来横隔膜の弱いか若しくは病弱杯で腹で氣息をすることを知らずして成長して仕舞ふ人は如何なる種類の人に多いかといふと、吃る人に最も多い。其の如何なる理由

かはこれから段々と話すことに致さう。右に申すごとく吃る人は大抵正しい腹式呼吸をすることが出来ぬ。所へ以て来て或は人の真似をするとか、又は何か咽喉の疾

## 2.8 8枚目

病に罹るとかすると、そこで一種の吃るといふ癖が付いて来るのである。故に吃音者が一番大切なることは、先づ其の呼吸を正しくすると云ふことをやらなくてはならぬ。我々が毎々申す通り、腹で呼吸をするやうにといふのは其れが為めである。腹で唸と呼吸が出来るやうにならぬと正しい声を発することは出来ぬ。そこで悪い癖が付いて吃るといふことが起るのである。其れゆゑ腹で呼吸をするのは抑々声を作る一番の元で、即ち声音を發出する根本の材料を作る為であるといふことをとくと合点せねばならぬ。

(注意) 普通一般に謂ふ所の腹式呼吸法の如く、吸息の後一次氣息をとめておいて、フット吹き出す事をしてハ不可ぬ。いつも喉ハ楽にあけおいて、スツスツ氣息が出入りするやうに常に心得て居らねばならぬ。(以下略)

## 3. おわりに

1で述べたように、伊澤修二関係資料は伊那市創造館に収蔵されている。上伊那教育会が編集し、同郷土館部(当時)が2009(平成21)年3月に発行した『上伊那教育会所蔵文化財 目録と考察』には、すべての伊澤修二資料と伊澤コレクションの目録と資料研究(考察)が掲載されており、伊澤修二に関する研究のガイド役になる。

『伊澤修二選集』が今日でも伊澤修二関係では最も充実した資料集であるが、400余りの資料のすべてが活字化されているわけではない。「10 視話法と訛音吃音の矯正」に掲載されている34の資料の中で活字化されて本文が掲載されている資料は14、残りの20は現在の所、伊那市創造館で申請をして、原資料を直接閲覧するしかない。そこで、上伊那教育会郷土研究部の歴史班では、『選集』に掲載されていない資料を活字化し、若干の考察を加えて発表する取り組みを継続している。伊澤修二資料のすべてを活字化するには遠い道のりだが、『選集』続編の出版などつながるステップになるのではないかと考えている。

なお、今回紹介した「科学的吃音矯正」は、田中貞光(現在、南箕輪小学校に勤務)が「伊澤資料の研究—『伊澤修二選集』10視話法と訛音吃音の矯正—20吃音通信矯正伝習並びに量気計説明書(明治44.6)」として平成20年度から23年度まで4回にわたって『上伊那教育会郷土研究部研究紀要』に掲載したレポートをもとに、塚田博之が編集したものである。<sup>6</sup>

6 田中の他に、「視話法と訛音 吃音矯正」については、春日宏之(箕輪東小学校)、「音楽教育」「国語と中国語」については塚田博之(高遠中学校)、「教育会関係」については下平哲(伊那市東部中学校)、「台湾教育」については田村栄作(高遠小学校)が記述しており、平成13年度からの『上伊那教育会郷土研究部研究紀要』に順次掲載されている。

資料1 『伊沢修二選集』に掲載された「10 視話法と訛音吃音の矯正」の目録

| 番号 | 資料名  | 年月日                                 | 資料の形態及び出典         |
|----|--|-------------------------------------|-------------------|
| 1  | グラハム、ベルにつき視話法を学ぶ   | 1876 (明治9) 年                        | 『楽石伊沢修二先生』        |
| 2  | 東京盲啞学校に於けるベル氏の演説を通訳  | 1898 (明治31) 年11月12日                 | 開発社発行『教育壇』23, 24号 |
| 3  | 東北地方発音矯正法についての弁  | 1901 (明治34) 年                       | 自筆罫紙七枚綴           |
| 4  | 視話法に関する講演の草案?  | 1901 (明治34) 年頃                      | 自筆罫紙三枚綴           |
| 5  | 吃音矯正に対する世評・防害・迷信等の記事   | 1902 (明治35) 年、<br>1903 (明治36) 年頃    | 『楽石叢誌』より抜粋        |
| 6  | 楽石社規程-楽石社主人告白-   | 1903 (明治36) 年3月                     | 『楽石伊沢修二先生』        |
| 7  | 視話法について-実験を主とした講習の筆記-  | 1904 (明治37) 年7月21日                  | 原稿用紙五七枚綴          |
| 8  | 楽石学院新築並に吃音矯正部特設につき寄附金募集の依頼状  | 1907 (明治40) 年3月                     | 自筆罫紙四枚綴と『楽石叢誌』第5輯 |
| 9  | 所感=茗溪会当番幹事の請により「言語疾患並に極端なる国語改良」について  | 1908 (明治41) 年2月                     | 茗溪会雑誌『教育』         |
| 10 | 売菓と吃音-貴族院予算委員会に於いて窪田衛生局長と質問応答の記事-  | 1909 (明治42) 年2月24日                  | 『楽石叢誌』22輯         |
| 11 | 吃音矯正について-山形県教育会の演説-  | 1909 (明治42) 年8月                     | 『楽石叢誌』2輯          |
| 12 | 吃音矯正と教育-全国中学校長会議に於ける講演-  | 1909 (明治42) 年                       | 『帝国教育』10月号        |
| 13 | 重聴(耳遠)に起因したる言語障害を矯正し併せて聴覚を発達せしめたる実験記   | 1908 (明治41) 年4月~<br>1909 (明治42) 年4月 | 『楽石叢誌』3及11輯       |
| 14 | 吃音者が哲人として後世に垂れた儀範  | 1909 (明治42) 年11月                    | 『楽石叢誌』3輯          |
| 15 | 目聡於耳。指敏於眼-財団法人小樽盲啞学校概覧の題字  | 1909 (明治42) 年12月                    |                   |
| 16 | 吃音矯正について-広島高等師範学校学生に対する講演  | 1910 (明治43) 年4月18日                  | 『教育研究会講演集』        |
| 17 | 吃音矯正満二千名の成績を報告し併せて朝野の諸賢に謝す   | 1910 (明治43) 年6月                     | 『楽石叢誌』4輯          |
| 18 | 日本吃音矯正法発明の由来   | 1910 (明治43) 年12月                    | 『楽石叢誌』5輯          |
| 19 | 楽石学院新築落成記念会に於ける演説  | 1911 (明治44) 年6月                     | 『楽石叢誌』6輯          |
| 20 | 吃音通信矯正伝習並びに量気計説明書  | 1911 (明治44) 年6月                     | 罫紙26枚綴            |
| 21 | 楽石社本年度事業計画-難聴者矯正部新設・吃音矯正部拡張・国語正音部の増設・唱歌正音部の開設等を計画-   | 1912 (明治45) 年1月1日                   | 『楽石叢誌』7輯          |
| 22 | 吃音は多く真似から来るのです   | 1912 (明治45) 年2月                     | 雑誌『斯民』へ談話         |
| 23 | 模倣は吃音の最大原因なり   | 1912 (明治45) 年4月1日                   | 『楽石叢誌』10輯         |
| 24 | 聾啞教育家ド・レイイ氏二百年誕辰記念会に於ける演説  | 1912 (明治45) 年6月1日                   | 『楽石叢誌』12輯         |
| 25 | 吃音矯正の原理略説(一)(未完結)  | 1912 (大正元) 年8月1日                    | 『楽石叢誌』14輯         |
| 26 | 吃音矯正の患沢支那四億万の蒼生に及ぼさんとす   | 1912 (大正元) 年9月1日                    | 『楽石叢誌』15輯         |
| 27 | 重聴者の矯正   | 1912 (大正元) 年12月1日                   | 『楽石叢誌』18輯         |
| 28 | 本院(楽石学院)事業の昨年と今年   | 1913 (大正2) 年1月15日                   | 『楽石叢誌』19輯         |
| 29 | 発音矯正の成績  | 1913 (大正2) 年8月                      | 『楽石叢誌』26輯         |
| 30 | 郷里高遠町建福寺に於ける吃音矯正講習受講者の談話   | 1916 (大正5) 年10月                     |                   |
| 31 | 松沢忠太著「最新吃音矯正法」の序文  | 1916 (大正5) 年12月                     |                   |
| 32 | 漢文及支那語学習の必要  | 1916 (大正5) 年頃か                      | 講習要項及自筆草案。罫紙二枚綴   |
| 33 | 楽石叢誌より抜粋資料<br>(1) 音韻及吃音訛音矯正に関する著書<br>(2) 楽石社創立以来十年間の経過<br>(3) 楽石社の事業と其関係規則<br>(4) 吃音・訛音矯正のため各地へ出張講習の記事<br>(5) 吃音矯正一夕話-創始・原理・順序・方法等について |                                     |                   |
| 34 | 先生の吃音矯正活躍時代の全国盲啞学校名一覧表   |                                     |                   |

※グレーの資料は、全文が『選集』に掲載されているものである。20については、田中貞光による翻刻がある。

資料2 「科学的吃音矯正 吃音矯正に就き最初に心得べき大切なる条項」のオリジナル(1枚目と2枚目)

科学的吃音矯正の開始  
 吃音矯正に就き、第一に心得べき大  
 切なる事項  
 最初

今日から通達矯正を始めます。その矯正  
 を始めるに先づ能く心得て居らぬは、大  
 切なる事項があります。其の心得を第一  
 に語ります。其れを能く聞かして、然る  
 後に置いて練習して、性ごとく自ら効果  
 を早く得る。故に能く是から語ります。

事を聞いて、其れを常に守つて性かねは、  
 先づ二年に吃りと云ふものは、如何なるもの  
 であるかといふは、吃りと云ふは、唾であるとか、或  
 は舌目であるとか、舌と舌と云ふ者は、舌と異つて  
 居る。唾と舌と云ふは、舌とは、所謂不具  
 者。舌の中が一つ缺けて居る。舌と云ふ  
 舌の視る官能、即ち視る官能と云ふものは、缺  
 けて居る。唾であれば、聴官、即ち聴く方の  
 官能が全く缺けて居る。即ち舌の中  
 一つ缺けて居るから、夫が為め、不具である。

之を何にかして、應じて、遺りたいと思つて、  
 教育者が如何に力を盡して、舌の  
 中缺けて居る官能を補ふことは、おまぬ。  
 不具は教育者の力で癒すことは、おまぬ。唯  
 或る相違の他官を以て、其の缺けて居  
 る官能の代り、使うて、如何にか用便の  
 足るやうにしてやうことは、出来ても、舌と  
 不具にするには、おまぬ。然るに吃りと  
 不具は、然るに舌と云ふものは、全く舌の具足  
 した完全な人であるけれども、物を言ふ持  
 ち、  
 小言へ、外から見ると、舌と不具者であ  
 るが、如く見えぬ。夫故、他からしては、不具者  
 扱ひにせられ、自分も不具者と、思ひ居  
 るが、舌の物を言ふことが出来ぬ。他人  
 からは、吃りと云ふと云うて、罵られ、嘲けり  
 れて、毎日、悲憤する生涯を送るものがある。  
 舌と云ふ、結舌、吃りと云ふものは、何であるかと  
 云ふ。たゞ、舌の舌の舌の一つの患、癖が、附  
 り居る為めに、今言ふが、非心、憐れな  
 る状態、舌と云ふもの。本社は、舌と云ふ